

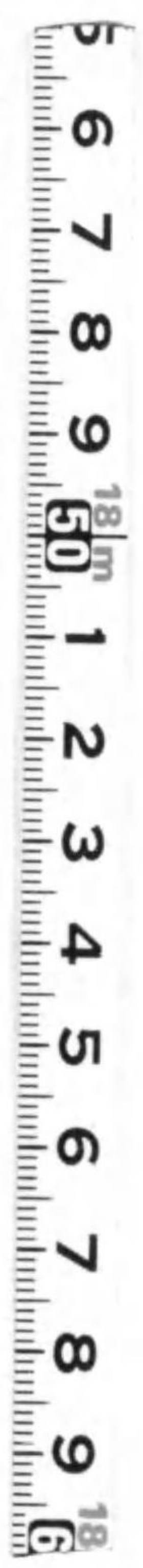
特 229

372

稻毛詛風稿

哲學概論

世界堂書店刊行



始



特 229  
372



稻毛詛風稿

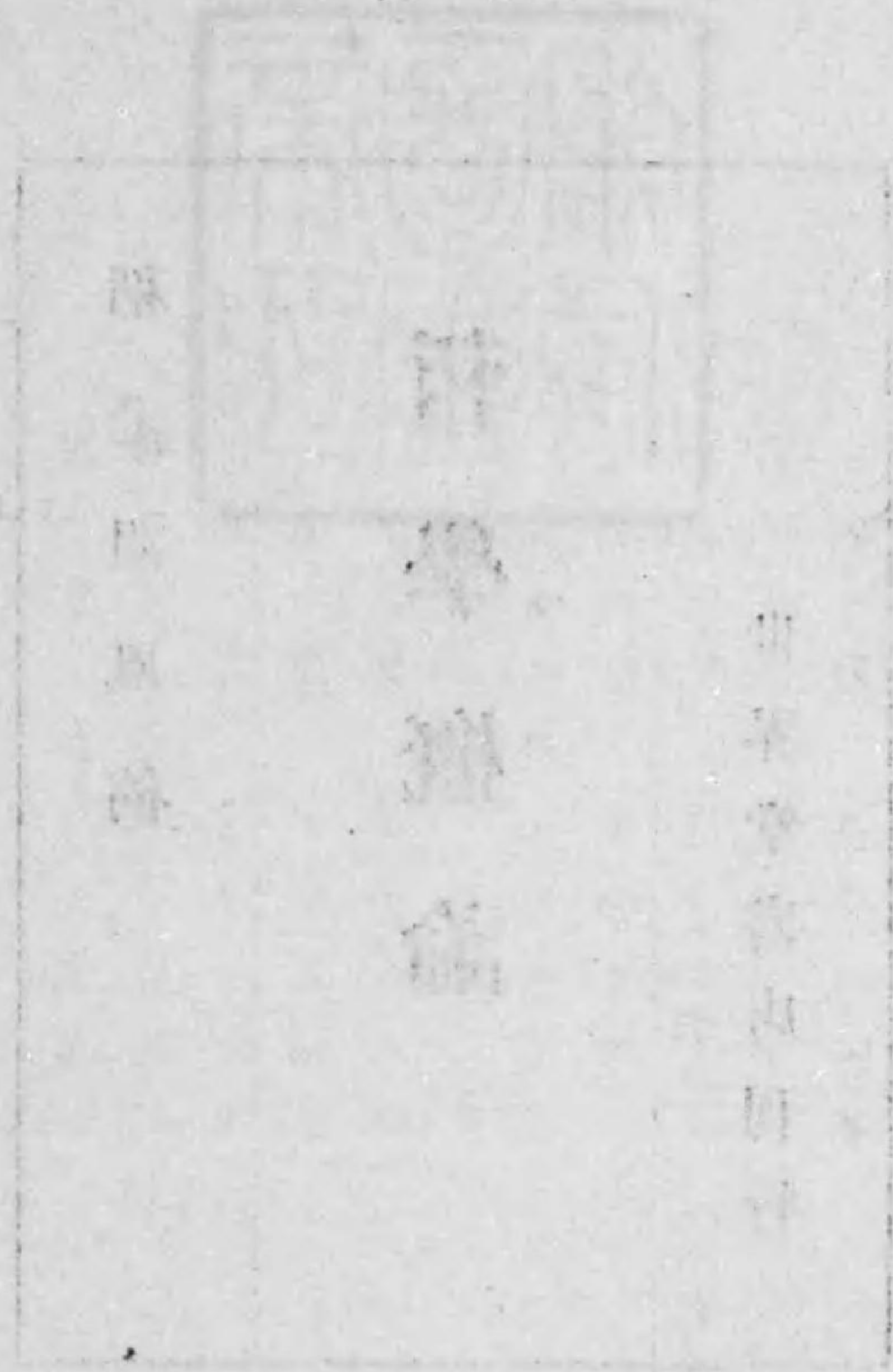
哲學概論

世界堂書店刊行



哲學概論 目次

第一章	哲學の價值	一
第二章	哲學の意義	三
第一節	哲學の定義	三
第二節	哲學の語義	三
第三節	哲學の形式	四
第一項	哲學の要素	四
第二項	哲學の屬性	五
第四節	哲學の内容	七
第五節	哲學と他の文化との關係	八
第三章	哲學の研究法	一〇
第一節	哲學の態度	二



第二章 哲學の研究法……………二

第四章 人生論……………二五

第一節 人生論の意義及び研究法……………二五

第二節 人生觀の種類……………二六

第三節 人生觀の批判……………三二

第四節 人生の本質……………四二

第一項 人生の定義……………四二

第二項 人生の本質—自覺としての人生……………四三

第三項 人生の精髄—創造としての人生……………四四

第四項 人生の形態……………四九

第五項 人生の内容及び分野……………五〇

第六項 人生の過程……………五一

第五章 認識論……………五五

第一節 認識論の意義及び價值……………五五

第二節 認識論の分野……………五六

第三節 認識の本質……………五七

第一項 認識の可能……………五七

第二項 認識の要素……………六一

第三項 認識の對象……………六六

第四節 認識の理想……………七〇

第一項 真理の性質……………七一

第二項 真理の動力……………七四

第三項 真理の標準……………七五

第四項 真理の價值……………七七

附錄 研究問題……………八〇

本稿  
哲學概論

稻毛金七

第一章 哲學の價值

世には、哲學の價值を否定するものが少くないが、哲學を、理論上又は學として價值なしとするもの、即ち、空漠なるもの科學と兩立しないとす  
るもの、變化常なしとするものは、理論的否定論であり、實際上、  
又は實生活上價值なしとするもの、即ち、無力と見るもの、有害と  
見るものは、實際的否定論である。そして、これらは何れも謬見で  
ある。哲學は、空漠でもなく、科學と兩立もし、哲學の變化は進歩  
であり、更に無力でも有害でもないからである。

そして、哲學の價值は、人生又は人間の本质を闡明することによ

二  
リ、自覺的存在としての人間の最深要求に對して、全的満足を與へ、個人に於ても全人類に於ても、自覺的現象としての人生の本質精髓の一根本要素となり、原動力となるところに存する。

## 第二章 哲學の意義

### 第一節 哲學の定義

哲學とは、全体的自覺の學又は最高本質の學である。詳しくは、自覺的存在たる人間の本質としての自覺性の精髓即ち理性を直接動力とし、科學を始め萬象を素材とし全我的方法又は觀明法、即ち、批判的論理的方法に即する直觀的體驗的方法を用ひて創建した根本原理の學、即ち最も高い意味に於ける人間學で、認識論と形而上學（人生觀及び世界觀）とを二大分野とし、最も十分な意味の獨立學にして基礎學であると共に、人生の動力基礎標的及び一根本要素となり、斯くして學問全體及び人生全體の進歩に貢獻することを目的乃至使命とするものである。

### 第二節 哲學の語義

「哲學」の原語は希臘語の *Philosophia* や「愛 (*Philo*)」及「學 (*sophia*)」の義である。そしてこの語が成語となつたのは、紀元前五世紀頃であり、術語となつたのは同四世紀頃である。邦譯は西周氏が明治十年に始めて試みたものである。

### 第三節 哲學の形式

哲學の意義は、形式と内容との両面より見ることが出来る。

哲學の形式は更に要素と屬性とに別れ、要素は更に動力と素材機會とに別れる。

#### 第一項 哲學の要素

三 哲學の動力——哲學的精神、哲學の動力は、哲學の主要素で、哲學的精神である。そして哲學的精神は、人生の精髓たる自覺性又は

最も高い意味の理性である。自覺性は、一方から見れば、全体的統一的徹底的價値的精神であり、他方から見れば、自己超越的精神。詳しくは、自識的 (反省的・批判的)、自律的 (自由的・發展的、永遠的) 精神である。尚、哲學的精神は、個人及び團體の両面に亘つてある。

三 哲學の素材及び機會。哲學の素材とは、廣義の知識又は思想即ち、常識、神話、俚諺、科學、舊哲學等である。

哲學の機會とは、哲學の動力と素材とを結合させるもので、修養、活動、特殊な思索研究、思想の發達及び新奇な現象の出現等である。

#### 第二項 哲學の屬性

哲學の屬性即ち哲學の哲學たる所以は、全体的自覺の學又は最高本質の學たるところに在する。

哲學は何よりも先づ「學」である。そしてこの點では、哲學は科學と撓を一にし、合理的知識即ち目的的、方法的、系統的、進歩的知識であつて、非學的知識即ち常識、私見、信仰とも実行とも趣を異にする。

併しながら哲學は「全体的自覺の學」又は「最高本質の學」たる點に於て、科學と區別されなくてはならない。即ち、科學は、部分的自覺の學であり、事實の學であり、随つて、特殊的、抽象的、假定的、相對的な合理的知識であるのに對し、哲學は、あらゆる事實の存在と認識とを可能ならしめるもので、普遍的、具原的、無假定的、絶對的な合理的知識である。哲學があらゆるものを對象とすると共に、全式的作用であり、其の考へ方が徹底的であるのも、亦これがために他ならない。

#### 第四節 哲學の内容

哲學は、全体的自覺の學であるが故に、其の對象即ち問題も亦無限である。

哲學の問題を別つて主観的及び客観的とする。前者は、自覺の主体即ち能知の方面で、知識問題であり、それを取扱ふ哲學の分野は認識論であり、後者は、自覺の客体即ち所知の方面で、実存問題であり、そしてこれを取扱ふ哲學の分野は、形而上學である。  
然るに、実存問題は、人間に對する關係上人生問題、人間問題又は倫理問題と宇宙問題、世界問題又は存在問題とに別れ、自ら形而上學も亦人生観、人間観、價值論と宇宙観、世界観、存在論とに別れる。

そしてこれを發生的見地から見れば、宇宙問題、人生問題、認識問題の順序で、哲學の問題及び哲學の分野が現れて来たのである。



## 第五節 哲學と他の文化との關係

哲學は、全体學ではあるが、全体其のものではない點で、結局、人生又は文化の一部分に過ぎない。随つて、哲學の本質を明かにするには、哲學の人生に於ける地位及びそれに對する使命即ち他の文化との關係異同を明かにしなくてはならない。

さて哲學は、第一に學である點に於て、科學と撓を一にする。事實、上古に於ては、哲學と科學との別がなかつた。今日は、兩者各獨立してゐるが、それがために兩者を矛盾すると見るは誤りで、寧ろ補合的關係を有するものと見なくてはならない。但し、哲學は科學の假定を闡明してそれに基礎を附與するものであるが故に、哲學は科學よりも一級高い地位を占めるのである。そして、哲學の分野中、科學と最も關係の近密なものは、認識論である。これ、認識論が科學批判といはれる所以である。

第二に、哲學と密接な關係を有するものは、宗教と藝術とである。即ち、宗教も藝術も、人生又は実有の價値的方面を對象とする點に於て哲學と近似する。併しなから、哲學は學であり知識であるのに對して、宗教も藝術も學でも知識でもなくして信仰であり觀照である點に於て、兩者は其の趣を異にする。そして、宗教及び藝術に關係の深い哲學の分野は、形而上學である。

第三に、哲學と教育とも密接な關係がある。即ち、哲學も教育も等しく全体及び價値としての人生を對象とする點に於ては撓を一にするが、而も、哲學は主として目的理想の方面を對象とするのに對し、教育は主として方法手段の方面を對象とする點に於て、兩者は寧ろ反極的關係を有するものである。

### 第三章 哲學の研究法

學は凡て方法的知識であるが、哲學は、科學に比して一層研究法を重視しなくてはならない。哲學が科學と異なるのは、其の素材ではなくて寧ろ其の方法だからである。即ち、哲學が全体的自覺の學であるとか、最高本質の學であるとか、根本原理の學であるとかいふことは、畢竟、最も完全な研究法を必要とする學だといふことだからである。

さて、方法には種々の意義がある。(一)廣義の方法は、態度即ち哲學を研究し創建する際の心構へと、廣義の研究法とを包含するものであり。(二)狹義の方法は、廣義の研究法即ち既存の哲學を理解する方法と新哲學を創建する方法とを包含するものであり。(三)最狹義の方法は、新哲學を創建する方法である。そして、哲學研究法の先後は、態度、研究法、創建法の順序に従ふべきものである。

#### 第一節 哲學の態度

哲學の態度は、哲學を理解し創建する際的心構へで、獨斷的、懷疑的、批判的の三つに大別することが出来る。

(一)獨斷的態度は、哲學を研究することなしに、其の價值を肯定し(肯定的獨斷的態度)又は否定する(否定的獨斷的態度)ものであるが故に、哲學の態度としては採るべからざるものである。

(二)懷疑的態度は、哲學を研究することなしに、其の價值を疑ふ態度であるが、軽々しく哲學の價值を肯定も否定もしない點に於て、批判的態度に近く、疑ふこと其のことを疑はる點に於て獨斷的である。

(三)批判的態度は、哲學を研究した上で其の價值を決定しようとする態度であるが故に、いはゞ懷疑的態度の洗練されたもので、最も健全な態度である。

これを要するに、獨断的態度からは、哲學の研究に、正しい信仰の必要なることを學び、懷疑的態度からは、考へるだけ考へること、即ち、徹底的思索又は研究の態度を學び、斯くして、採るべき採り、捨つべきは捨てる批判的態度を涵養し活用するやうにしなくてはならない。

## 第二節 哲學の研究法

狭義の研究法に、歴史的方法と論理的方法との二種ある。歴史的方法とは、哲學發達の跡を辿ることによつて、進歩的知識として、哲學を理解する方法で、これに該当するものは哲學史であり、論理的方法とは、哲學一般を論理的に研究することによつて、系統的知識としての哲學を理解する方法で、これに相應するものは、哲學概論である。

哲學が、系統的にして進歩的な學問であるかぎり、この二つの方法は併用されなくてはならない。そして、論理的方法から歴史的方法に及ぶと共に、前者が主となるべきものである。但し、先づ哲學概論から入り、次に哲學史を一通理解したならば、論理的方法と歴史的方法とを併用して、一層精到な知識を獲得するやうにしなくてはならない。斯くして、哲學の研究が次第に進歩し、おのづから批判力も發達する時には、哲學的創造性が漸を逐ふて次第に發動し、やがて獨自の哲學を創建しようとする要求が撞頭するやうになるのである。そしてこの要求を事實化するに必要な方法は、やがて創建法である。

哲學の創建法は、一言に全我的方法又は觀明法である。即ち、論理的、批判的方法に即する直觀的、體驗的方法である。論理的、批判的方法は、主として、哲學の知的方面即ち認識論的方面の研究に

該当する方法であり、直観的、体験的方法は、主として哲學の情意  
的方面即ち、形而上學的方面の研究に恰適するものである。但し、  
これは、勿論、便宜的區分で、實際に於ては、相互、表裏呼應して  
理性の全体的発動をはかるものである。若し、これに反して、一方  
のみを偏重する時には、不完全な哲學しか創建されないのである。  
華実、西洋哲學は概して、前者を偏重し、東洋哲學は概して後者を  
偏重してゐるのである。そして両方法を併用するに必要なものは、  
辨證法の活用である。蓋し、辨證法は矛盾對立を綜合することによ  
つて、新しき理論を構成する方法だからである。

## 第四章 人生論

### 第一節 人生論の意義及び研究法

人生論は、人生又は人間の本质を闡明することを職能とする哲學  
の一分野である。

然るに、哲學は、畢竟するに人生學又は人間學であるかぎり、人  
生論の哲學体系上に占める地位は極めて高い。併しながら、哲學は  
學の學であるかぎり、人生論と共に認識論が必要であるばかりでな  
く、存在論、宇宙論又は世界観も必要である。

人生論を研究するには、一方在來の人生觀を批判的に検討すると  
共に、他方、其の成果を素材とし、且つこれを自己の信念及び要求  
によつて独自の理論に構成するやうにしなくてはならぬ。

第二節 人生觀の種類

数多い人生觀を、先づ、方法上のものと理論上のものとの二大別する。方法上の人生觀とは、人生觀樹立の方法上の差異による區別であり、理論上の人生觀とは、人生觀の内容の相違に従ふ分類である。

然るに、(一)方法上の人生觀は、更に、非學的方法上のものと學的方法上のものと別つて出来る。

(二) 非學的方法上の人生觀とは、人生觀の樹立及び表現の方法が學的方法上のものであり、そしてこれは更に常識的、藝術的、宗教的に三分出来ること出来る。

(三) 常識的方法上の人生觀とは、經驗の結果として不知不識の間に出來上つた人生觀で、一般人の懐抱する人生觀の大半はこれに属する。例へば、幸福の増進が人生の目的であるとか、衆あれば苦あるのが入

生だとか、老少不常が人生だとかいふが如き、即ちこれである。

(四) 藝術的方法上の人生觀とは、感情を直接乃至主要動力とし、觀照と直観とによつて感得した人生に関する理解を藝術的形式で表現した人生觀である。ゴッテの『ファウスト』やシェクスピアの『ハムレット』の如きは、其の代表的なものである。

(五) 宗教的方法上の人生觀とは、信仰中心の人生觀、即ち、絶対的存在の確信の上に立てられた人生觀で、例へば、釋迦の悲觀的人生觀や日蓮の奮闘的人生觀や基督の靈的人生觀の如きである。

(六) 學的方法上の人生觀とは、人生觀の樹立及び表現の方法が學的方法上のもので、これは更に、科學的方法上のものと哲學的方法上のものとに別れる。

(七) 科學的方法上の人生觀とは、科學的方法によつて樹立し表現された人生觀であり、隨つて、人生の事實觀又は現實觀である。例へば、ダーウインの進化論的人生觀や犯罪論者の退化的人生觀の如きである。

(一) 哲學的的人生觀とは、哲學的方法によつて樹立し表現された人生の本質觀、即明確な根本原理によつて統一された人生觀である。例へば、ショーペンハウエルやニーチェやベルグソンやハイデッガーやヤスパース等の人生觀の如きである。

(二) 理説上の人生觀は、更に態度と内容とに別つことが出来る。三態度から見た人生觀とは、人生に對する態度の相違、即ち、人生を價値あるものと見るか否かによる人生の區別である。そして、これは更に、懷疑觀、否定觀、肯定觀に別れる。

(三) 懷疑觀又は懷疑的的人生觀とは人生は果して生活に價するか否かが不明だとする人生觀で否定觀、肯定觀、分離對立前の人生觀である。四否定觀、否定的的人生觀又は厭世觀とは、人生を生活するに價しないと見るものであるが、これは更に、(一)極端なもの、即ち、人生を積極的に否定し、死—自殺を以て唯一最善の途と見るものと(二)緩和なもの、即ち、人生を生活に價しないもの、又は、悪(醜、苦)と見ながら、必ずしも積極的にこれを否定しようとは

せず、消極的な態度、即ち、無為に且いや／＼生を続けることを以てこれに對するものとに別れる。

(四) 肯定觀、肯定的的人生觀又は樂天觀とは、人生を生活に價するものと見、隨つて喜んで生活するものであるが、これは更に、興へられた儘の生活を直ちに價ありと見るもの、即ち、文字通りの樂天觀と、(三)興へられた生活は、本質としては價値があるが、而も事實としては、不完全であるからこれを改善しなくてはならないと見る改善觀と、(四)人生は出来合のものではなくて創造すべきものであり、且この創造すべきもの、即ち、あるべきものとしての人生を肯定する創造觀との別がある。

(五) 内容から見た人生觀とは、人生を生活に價すると見る理由根據が何処にあるか、即ち、人生の價値内容が何であるかに關する觀方の相違に従ふ人生觀の區別で、人生主義と非人生主義、個別主義と普遍主義、現實主義と理想主義、唯物主義と唯心主義が、其の代

表的な種別である。

(1) 人生主義とは、人生を、其自身獨立の價値を存し、且全実有中最も優れたものと見ると共に、人生が其自身獨立の價値があるのは、自覺的なためだとするものである。

(2) 非人生主義とは、人生の獨立性を認めず、何等か一層大きなものの一部分又は一層高いものの手段乃至前程と見るもので、これは更に、(1) 自然主義、即ち、人生を自然の一部分と見るものと、(3) 超人生主義、即ち、人生を実有の單なる一部分又は神靈界、天上界への單なる手段乃至前程と見るものとの別がある。

(4) 個別主義とは、人生の本質を別個性にあると見る人生観であるが、個別性の解釋の差に順じて、更に主我主義、獨善主義、利己主義、個性主義等に別れる。

(5) 普遍主義とは、人生の本質を普遍性にあると見る人生観であ

るが、普遍性の解釋の差に順じて、更に、人格主義、利他主義、家  
族主義、社会主義、國家主義、民族主義、人類（人道）、世界、國  
際主義等に別れる。

(6) 現実主義（又は利己主義）とは、人生の本質を現実（又は利己）  
にあると見る人生観で、保守主義、無為主義、享樂主義、消費主義、  
傾宜主義等が、其の内容である。

(7) 理想主義（又は永遠主義）とは、人生の本質を理想（又は永遠）  
にあると見る人生観で、進歩主義、將來主義、奮闘主義、克己主義、  
生産主義、責任主義等が、其の内容である。

(8) 唯物主義とは、人生の本質を物質と見る人生観で、物質の解釋  
の差によつて、更に、肉體（感覺）的と経済的とに別れる。

(9) 唯心主義とは、人生の本質を精神と見る人生観で、精神の解釋  
の相違に順じて、更に、道德的、藝術的、宗教的、學術的等に別れ

る。

二二

### 第三節 人生観の批判

第一に、方法上の人生観について見るに、何れも、それ々の價値を有してゐると共に、一面観たるの缺點がある。嚴密な意味の人生観は、人生の現実面と理想面とを包括すべきものであると共に、後者を主とすべきものであり、且其の方法は、體驗と論理とを併せ活用した生ける體系でなくてはならないのに、上記の諸人生観は、何れもこの條件を完備してゐないからである。

事實、非學的的人生観は、體驗を主要方法とする點に於ては優つてゐるが、論理と體系とを缺くのが弱點である。これに對して、學的的人生観は、論理的、体系的である點に長所があるが、體驗に裏付けられてゐない點に短所がある。更に、常識観や藝術観や科學観は、

現実観に傾き、宗教観や哲學観は、理想観に偏しがちな點に於て、其の弊を一にする。

更にこれを細論すれば、**一**常識的的人生観は、低級な人生観であるにも係らず、これを捧持するものが非常に多く、**二**藝術的的人生観は、兎角極端に流れがちであるにも係らず、其の捧持者は前者に次いで多く、而も感情的であるだけ其の影響が強く、殊に、婦人や青年や感情家に於て著しい。**三**科學的的人生観は、人生の現実を主要対象とするがために、兎角人生を、視しがちであり、**四**宗教的的人生観は、最も有力な人生観ではあるが、而も極端に流れ易く、且何れかといへば、理想に偏するか或は暗黒面に傾くが故に、人生を悲観しがちである。**五**哲學的的人生観は、大体最も妥当な人生観であるが、**六**其の原理が高遠深遠であり抽象的であるために、俗耳に入り難き處ある。



斯くして、方法から見ても真に妥当な人生観は、これらの諸人生観を包括し綜合統一したものでなくてはならない。即ち、一方、常識観や藝術観や科学観を綜合統一して人生の事實観、現実観を構成し、他方、哲學観や宗教観を綜合統一して、人生の本質観、理想観を構成し、更に、後者を主として前者を統一してのみ始めて真の人生観が成立するのである。

第二に、態度上の人生観について見るに、人生観の使命が人生肯定の基礎を確立することに存するかぎり、肯定観が最も妥当な人生観であることは、改めていふまでもない。

但し、妥当な人生観が肯定観でなくてはならないといふことは、凡ての肯定観が同様に價值ある人生観だといふことでも、懷疑観や否定観には何等の価値がないといふことでもない。否、眞の肯定は

懷疑と否定とを不可欠の要因乃至條件とするものであるかぎり、懷疑観及び否定観にも相當の價值があると共に、眞に妥当な肯定観は、懷疑観や否定観と矛盾するものではなくて、これを包括し、これを内在的に超越するものでなくてはならない。

これを詳言するに、①懷疑観は、デカルト及びカントが力説し実行したやうに、輕々しく、即ち、獨断的に人生を肯定も否定もしないで、先づ其の根據條件を確定し、然る後に其の價值の有無を檢しようとする所に、其の特色が存する。併しながら、それは何處までも正しき判断の前提であり、其の方法であり、随つて、断じて疑念に止り徹してはならない。蓋し、疑念は判断中止状態、即ち、眞偽又は價值の有無に對して確守たる積極的断定を下さない、否、下し得ない状態であり、随つて、消極的にのみ、即ち、方法的にのみ價值があるからである。そして、茲に、懷疑的的人生観の短所がある。

實に、懷疑觀は、不徹底であり、消極的であり、且自己撞着的である點に於て、未だ嚴密な意味の人生觀と稱することが出来ない。人生が生活に價するか否かを疑ふのは、人生の價値肯定に對する要求が表裏に動いてゐる證據である點に於て肯定的であり、隨つて否定的にして肯定的なのが懷疑觀だからである。況んや懷疑觀は、人生には價値があるかないか判らないとしながら、判らないことが判るとしてゐる點に示唆されてゐるやうに、これを徹底すれば、疑ふこと其のことを疑ふべきであり、隨つて何等の断定も下し得なくなるに於てをや。

要するに、懷疑觀は、嚴密な意味の人生觀としては支持し得ないのである。

(三) 否定觀は、懷疑觀に比すれば、徹底的ではあるが、而もそれ

以上消極的であり自己撞着的である點に於て、一層不完全な人生觀であり、隨つて、長所と見るべきものが殆どない程である。少くとも、極端な否定觀に於てさうである。人生觀の意義も價値も、人生肯定の根據となる所にあるのに、否定觀はこれに反するからである。世には、「死のための人生」などといふものもないではないが、これは、嚴密な意味の人生觀ではなくて、寧ろ実存觀である。事實、眞に人生の價値を否定するものにとつては人生がなく、隨つて人生觀もあり得ないのである。倒まにいへば、生きてゐるかぎり、縱ひ人生否定觀を提唱したり懐抱したりしても、未だ眞の否定觀には到達しないのである。

否、たとひ眞に人生を生活するに價しないとして自殺を決行するやうな場合に於ては、其の自殺が否定的人生觀に從つての自殺、即ち自覺的の自殺であるかぎり、自殺者の表裏には、必ず何等かの

意味又は方法で人生の價値を肯定しようとする要求、即ち、よりよ  
き人生への要望を懷抱してゐるのである。實に自殺者の大部分は、  
没自覺的に、又はよい加減に生きてゐるよりも、遙かに眞剣な人生  
發を有するものである。隨つて、態度から見た自殺者の缺點は、只  
この人生發を積極的に又は内容的に具現し得ない弱さのみ存する。  
勿論、實際の自殺には諸多の種類があるが故に、一概に評價し去  
ることは出来ない。そして自殺の評價を誤らないためには、凡そ  
行為同様、其の動機及び結果の両面から見なくてはならない。即ち  
三其の動機に於ては、先づ(1)人生全体又は人生そのものの價値を否  
定するのかが、次に(2)死—自殺後のことに關して何等かの考慮を拂つ  
ての自殺か、但しは單に過去又は現在の苦悶や艱難を脱れんがため  
の自殺か、次に(3)自己一身のことのみを考慮しての自殺か、それと

も、他人—家族、社會、國家、人類のことを考慮しての自殺か等を  
検討すべきであり、三其の結果に於ては、自殺が生疎よりも自殺  
者其のもの及び他人—家族、社會、國家、人類の價値を増進したか、  
それとも低減したかを考慮すべきである。そして、是認さるべき自  
殺は、ひとり、其の動機に於て、將來本位であると共に社会的であ  
り、其の結果に於て、價値増進的であるもののみである。即ち、生  
きてゐるよりも死ぬことが自己及び社會に益を多く與へるか、又は  
害を少く與へることが明かな場合のみである。  
然るに、斯くの如きは、實は眞に生きるための自殺であるが故に、  
嚴密にいへば、文字通りの自殺は、如何なるものも肯認されないのである。

自殺以外の否定観は、表面極端な否定観のやうに思はれるが、實  
は大抵穏和な否定観、即ち人生に不満を懷きながらずく／＼と生氣

も光彩もない生活を続けて行くといふ観方になるのである。そしてこの観方が極端な否定観よりも一層弱い人間の人生観であることは改めていふまでもない。人生に對して真に強く且つ真剣な態度を取るものならば、生活に償しない人生は、断然破壊するか、さもなくば、全力を盡してこれを改造するか、又は、一層優秀な人生を創造するかの何れかに出なくてはならないからである。

以上、要するに、懷疑観も否定観も、等しく不完全な人生観である。随つて、嚴密な意味で人生観と稱し得るものは、肯定観のみである。而も肯定観には三種の別があるために、其の中の何れが最も妥当な人生観であるかを検討しなくてはならない。そして與へられのままの人生を直ちに肯定することは、人生を非人生（自然）から區別する根拠又は條件を蔑視排除することであるが故に、人生観としては、未だ真に優秀なものといふことが出来ない。斯くして、改造

観が創造観かの何れかに就かなくてはならない。

然るに、改造と創造とは、全然別なものではなくて、畢竟、程度の差であり、且後者が前者よりも一層積極的であるのみである。

第三に、内容上の人生観について見よう。

三、人生主義と非人生主義とを比べて見るに、前者が後者に優つてゐる。人生の獨立性を確立することが正しき人生観の最大條件であり、殊に、人生主義が、人生の内容的特質を自覺的なところにあるとし、且人生を、價值的には実有中最高のものとするのは、人生を自然及び神國から截然區別する所以だからである。

但し、真に妥当な人生主義は、決して人生に自然的な要素や神的部分が全然無いとするものではなくて、寧ろ人生は、自然的な境地から出発し又は自然を素材乃至機会とし、理性即ち自覺によつて神的な境地まで向上するところに、否、自然生活と神的生活との直

接統一を、即ち神と神との相剋闘争を内容とすることによつて、自然とも神國とも異つた其自身の獨自性を具備する中間帯又は辯證的現象であるとするものである。即ち、人生は、性的生活又は肉体的物質的生活に始つて宗教的生活に終り、本能に始つて信仰に終り、没自覺的生活から出発して超自覺的生活に到ると見るのが、人生主義の人生觀である。

(三) 個別主義と普遍主義とを比べて見るに、後者が前者に優つてゐる。

個別主義は、人間が凡て、個体であるかぎり、何人も容易く了解することの出来る人生觀であるが、而もこれは明かに抽象觀である。凡そ具象的な即ち本當の存在は個別即ち普遍体である。事實、如何なる個別体と雖も、必ず他の個別体及び諸個別体を包括する普遍体を豫想してのみ、認識も存在も可能である。況んや、嚴密な意味の

人生に於ては、自覺も價値も容觀的なものであるかぎり、單に一個人のみの人生といふやうなものは、到底認識も存在も不可能であるに於てをや。

更に、個別主義の人生觀が假に大まかな意味で存在が可能だとしても、それは極めて偏狹貧弱、低級な人生觀である。

要するに、個別主義の人生觀は、正しき人生觀の出発點、過渡的段階又は一面に過ぎない。併しながら、人生が個別即普遍体であるかぎり、個別主義の人生觀は、無下に排斥さるべきものではなくて、普遍主義の人生觀を綜合統一して正しき人生觀を構成すべきものである。

これに對し、普遍主義の人生觀は、其の極端なものは、個別主義同種抽象的であるが、実存する普遍主義は、個別性を普遍性の内容とするが故に、個別主義に比して、少くとも一般眞実に近い人生觀

である。そして救ある普遍主義中最も妥当なものは、個別主義に相即するもの、即ち、一方多数の個別性を包含すると共に、他方、最高の普遍性の本質的要因となるものを原理とする普遍主義、即ち、國家主義である。随って、普遍主義にして妥当な人生観ならんとするには、必ず個別主義を自家兼籠中のものとしなくてはならない。

③ 現実主義と理想主義も亦等しく一面的な人生観であると共に、後者が幾分優つてゐる點は、個別主義と普遍主義との関係と同様である。

凡そ世に最も確實なものは「現実」であり、そして現実主義の強みはやがて茲に存する。只、問題は、現実の意味にある。若しも現実が、低級な現実主義の考へるやうな、目前を徂徠する没價値的な一刹那一刹那を意味し、随って、過去も将来も顧慮せず、責任も義務も理想も努力も発奮も精進も歴史も社会も蔑視して、偏に文字通

の刹那的満足や感覺的享樂を以て人生の本質とするならば、斯くの如き人生観は到底支持し難い。斯くの如き生活には、特に「人」生と稱するに足るもの、即ち、動物生活又は自然生活と異なる何ものもあり得ないからである。況んや、文字通の現実、即ち、過去にも将来にも何等の関係がなく、随って、寸毫も永續性又は内容性のないいはば幾何學的點の如きは、断じて確實な存在ではなくて、抽象的假定的な存在であるに於てをや。

事實、實際の現実主義は、必ず何等かの永續性、内容性を具有する現実を原理としてゐるのである。少くともさうでないかぎり、現実主義は成り立たないのである。現実主義の標語たる「刹那の満足充實」といふことは、過去に於ける、又は、過去からの要望が実現されたことか、現在の要望が将来に於て実現されることか、乃至は、過去の要望の實現に伴ふ満足を幾分でも長く将来に持続せんとする

だからである。

但し、これは、現実主義が無価値だといふことでないばかりか、寧ろ正しき意味の現実主義こそ真に妥当な人生観だといふことであると共に、只、正しき意味の現実主義の原理たる現実とは、文字通りの刹那ではなくて、過去と将来とを荷孕する永遠的現在だといふことである。

これに對し、理想主義は、人生観成立の主要條件即ち価値ある生活を営みたい、又は、人生や人間の価値を高めたいといふ動機と、将来即ち人生の永続性と人間の創造力、改造力又は人生の発展性とに對する確信を基礎とし、斯くして人生を非人生—自然から區別して其の獨立と卓越とを可能ならしめるところに、其の長所が存する。そして、理想主義は、人生の價值を将来又は超時空界に求めるものであるが故に、当然永遠主義であると共に、理想はあるべきもので

あり、且実現されてのみ始めて其の意義が充實するものであるが、而も理想の実現は努力を必須條件とするものであり、更に、理想の実現は一段高大な理想の樹立を意味するが故に、當然、創造主義、改造主義、努力主義、奮闘主義、向上主義である。

但し、理想主義をして斯くの如き健全なものたらしめるには、必ず前記の現実を活用するやうにしなければならない。然らずば、理想は本来現実性即ち実現の可能性と実現の必然性とを不可缺的條件とするものであるが、無効貧寒な高踏主義、逃避主義、将来主義、空想主義、感傷主義、無為主義に墮するからである。事實、健全な理想主義程、理想の樹立に際して現実を顧慮すると共に、理想実現の方途に對して周匝な考察を、うすものであり、劇に、人生の現実に對する豊かな理解を持つもののみ、健全な理想主義者となり得るのである。

要するに、現実と理想又は刹那と永遠とは、具象的人生の不可能的な要素又は方面であるが故に、真に健全な人生観は、この両面を包括し統一するものでなくてはならないが、而も價値的には、理想永遠が一段高次であることを忘れてはならない。

(四) 唯物主義と唯心主義とを比べて見るに、これまた略前二項の如く、唯心論が優つてゐる。

唯物論は、極めて了解し易く、入り易い人生観である。少くとも幼稚低級な人間、即ち自覚の低暗な人間にとつては、最も理解し易く又最も都合のよい人生観である。物—物質や身体は、如何程幼稚な人間にも容易く認識されると共に、隨つて、これを利用することも亦何人にも容易いことだからである。

併しながら、一步を進めて考へると、「物がある」といふことも「物である」といふことも、心が認めることによつてのみ可能であ

る。事實、一般に「物」と呼ばれるものは、三心の表現として、心と共に知られる身体、三心の配意の對象たり心の手段たる道具及び三單なる心の對象即ち純粹の客体を自然以外にはなく、そして、前二者は、心によつて認められる限りに於てのみ物であり得ることはいふまでもないが、自然さへ、カントがいつたやうに認識主観即ち心が法則を附與したものの、又はハイデッガーの所謂心の決如的狀態—不完全体に過ぎないものである。而も、嚴密な意味の存在は自分で自己を現はにすること即ち自己了解又は自覚であるが、物は、嚴密な意味の存在ではなく、殊に、純粹の物といふが如きは、人間が、何の用に立つたかといふ見地から、有用性を抽象したものに他ならないのである。

要するに、物は、無自覺的存在で、單に空間を占めるといふ意味では存在するか、存在するといふことも、物であるといふことも、



自己をどう取扱ふべきかといふことも、知らず、又單に機械的因果的に連続するといふ意味では運動し変化するが、自己が変化するといふことも、変化があるといふことも、変化が何であり、且變化に對してどういふ態度や處置を取るべきかといふことも知らない存在である。随つて、斯くの如き物には、獨立性がないと共に、價値の高下を決定する根拠もないのである。人生の獨立性を確保し其の基礎を確立することを最高使命とする人生觀が、到底斯くの如き物を原理とすることによつて基礎づけられないことは自明である。そして茲に、唯物主義的の人生觀の端點がある。

但し、これは、唯物主義の人生觀が全然誤謬無價値だといふことではない。要は、唯物主義の安当し得るのは、自覺の低暗な人間や「如何にし生活するか」といふ人生の方途的、第二義的方面、即ち、人生の低級皮相な部分や方面に對してのみであると共に、唯物主義

は、唯心主義を豫想し且それを根拠としてのみ可能だとするだけである。申す、唯物主義に満足するもの又は唯物主義を必要とするものは、單に生存することだけに満足するもの、單なる奴隷や手段に甘んずるもの、目前の刹那的享樂に耽るもの、乃至、利己的なもの等ではないか。

唯心主義は、心を原理とするかぎり、人生の人生たる所以即ち其の本質を闡明することによつて、其の獨立性に確乎たる根拠を附與する點に於て、断じて唯物主義に優つてゐる。即ち、人生を自覺的なものと見るかぎり、必ず唯心主義に據らなくてはならない。

併しながら、唯心主義が文字通に「唯心」主義であつて、如何なる意味に於ても、物の存在及び價値を肯認しないやうなものであるば、それは、極端な唯物論同様、不完全である。心と言ひ物と稱するも、畢竟、真人生の二面、即ち、心的方面は、其の第一義的、基

礎的、本源的、高自覺的、目的的、理想的、主体的方面であり、物的方面は、其の第二義的方面―枝葉的、派生的、低自覺的、手段的、現実的、客体的方面であつて、何れも不可欠的なものである。且この両面は、平行的の相制的關係を有するものである。併しながら、人生が自覺性を根本特質とすると共に、自覺が心的なものであり、更に心的なものが物的なものを包含するかぎり、唯心主義が唯物主義よりも一層妥當な人生觀であるといはなくてはならぬ。

#### 第四節 人生の本質

##### 第一項 人生の定義

人生は、最も十分な意味の実有又は実有の典型である。自覺性を本質とし、創造性を精髓とし、辨證性を形態とし、價值性を内容と

し、人格と文化（歴史と社会）とを二大分野とし、修養と活動とを二大過程とする人間生活である。

##### 第二項 人生の本質―自覺としての人生

人生の本質は自覺性である。そして、自覺とは、理性を直接動力とし、反省と事功とにより、自己の存在性、個別性の真相を理解することに即して、自己の價值性、普遍性の本質を認識すると共に、それを高めるために、自己の使命を感得し、理想を掲樹し、目的を設定し、且これを實現達成する方法手段を考察し、これを実行し、更に、斯くの如き態度を以て他人と協力し、人間全体又は人生全体を上記の如くならしめることである。

思ふに、人間には諸多の特質があるが、「人間とは何か」と自ら問ひ、且これに對して自ら答へる所に、即ち自覺的存在たるところ

に、其の根本特質が存する。人間が理性的存在だといはれるのもやがてこれがためである。而も人間は、單に人間は何であるかと、自ら問ひ、且自らこれに答へるばかりでなく、この答から更に問を生み、この問に又答へるといふ様に、不斷に且永遠に問と答とを追求して行く點に於て、發展的存在であると共に、人間以外のあらゆる存在が何であるかを自ら問ひ且自らこれに答へることによつて、森羅萬象即ち実有の本質を闡明する存在である點に於て、人間は正しく萬物の靈長であり、人生は眞に実有の典型であるといはなくてはならぬ。実有の本質を闡明することを任務とする哲學が、人間又は人生にとつて如何に重要な意義を有するかは、おのづから明白であらう。

### 第三項 人生の精髄—創造としての人生

自覺性を本質とする人生の精髄は創造性である。自覺は發展であり、發展は創造だからである。

凡そ發展には三種の別がある。一廣義の發展は、自然的、必然的發展で、嚴密には寧ろ変化と呼ぶべきものであり、且鉉物に該当するものである。

二狹義の發展は、生物的、有機的、合目的的發展で、存在の各部分が全体の目的を実現する條件となり、而もそれが單純な組織から複雑な組織へ、分化と統一との断えざる過程によつて進み行くことで、嚴密には、寧ろ成長發育と呼ぶべきものであり、且、動植物に該当するものである。

三最狹義の發展は、精神的、人間的、自覺的發展で、時間的過程に於て、其の後段が前段に比し、一層高く且新しい價値を生み出すもので、これのみが、嚴密な意味の發展であると共に、其の精髄が

創造である。そして、自覚としての人生の精髓が創造だといふのはこれがためである。

人生が創造だといふことは、人生は自覚によつて創造し改造すべきものであり、随つて、発展的なものだといふことである。事実、人生は、創造的なものと自覚し、創造しようと思志しなければ成立しないのである。別言すれば、人生は、自己の力で成立するばかりでなく、自己の力で発展し、且常に目的理想を追求して永遠に止ることがないものである。人生に於て、要求、理想、努力、向上、改造、工夫、獨創、發明、發見等が重視され、修養と活動とが人生の大部分を占めるのも、これがために他ならない。

斯くして、人生は、これを個別的方面から見れば、各人が、自己の本質及び人生に對する使命を理解し、且自己の長所即ち創造性を十分に涵養、助長、發動活用することによつて、独自の價値を創造

し、斯くして、一方、人生に對する自己の使命を遂果し、人生に於て独自の地位を獲得し、随つて、生きることに満足を感じ、他方、他人、社会、國家、人類に對して出来るだけ多大の寄與貢獻を致し、随つて、生きることに光榮を感じ、且他人と協力して、他人をも自己同様の生活を営ましめることによつて、人生其のもの又は人生全体の本質的發展を図るところに、創造としての人生の眞義が存するのである。一言にすれば、寄與が人生の本旨であり、且人格の創造に即する文化の創造が人生の目的であり、但し、茲にいふ人格は國民的人格を典型とし、茲にいふ文化は國家的文化を代表とすることは勿論である。

人生の目的を、斯くの如く創造と見る時には、其の方途も亦これに俟つて創造を原理とするものでなくてはならない。

人生の方途は、態度と過程とに別れる。そして、この態度には、對

己的のものと對他的のものとの別がある。①對己的態度は、人格創造の態度で、自己信愛と刹那愛用とを含み、②對他的態度は、文化創造の態度で、寄與又は協力である。

然るに、協力は、對者との關係に順じて三種に別れる。①同等者に對する協力は「競」であり、②高優者に對する協力は「敬」であり、③低劣者に對する協力は「愛」である。競とは、共通目的の達成のために異つた方面から全力を出し合ふことであり、敬とは高優者を尊び、これに従ひ、これを範として發奮し、遂に自ら高優者の地位に達することであり、愛とは、低劣者を悲しみ、それが在ることに責任を感じ、これを庇ひ、これを激励し、やがてこれを彼自身の力で自己の地位まで向上させることである。

人生の過程には修養と活動の別があり、且前者は、自己の長短の自覺と伸長補短とを含み、後者は長所の活用であるが、これは、後

文に於て再述する。

#### 第四項 人生の形態

人生の形態は辨證性である。辨證性とは、對立の直接的統一、矛盾の直接的綜合乃至緊張闘争飛躍に依る發展の義である。

人生は、この意味の辨證的現象である。人生が表面矛盾だらけに見えるのは、これがためである。實に、人生は、①人生と非人生、必然と自由、存在と價値、②生と死、建設と破壊、幸と不幸、③心と物、目的と手段、人格と道具、④個別と普遍、主觀と客觀、相對と絶對、⑤現實と理想、刹那と永遠、變化と恒常、⑥觀想と実行、との對立又は矛盾を必須の條件とするものである。

併しながら、人生の人生たる所以は、これらの對立矛盾の儘に委ねないで、對立矛盾に即して統一綜合することによつて、發展又は

創造を可能ならしめる所に存する。そしてこの點から見れば、人生の形態が辯證的だといふことは、やがて人生が中間的現象の超越だといふことであり、更に、人生は不安の克服だといふことである。

### 第五項 人生の内容及び分野

人生の内容は價值性である。人生が自覺的現象だといふことは、價值的現象即ち、價值を生み價值を高めることを内容とする現象だといふことである。事実、價值的自覺を持たないものは人間ではない。人間のみが人格であり、且修養（教育を含む）を為し得ると共に文化の創造者であり得るのは、けだし、これがためである。

然るに、價值は、普遍化的現象であり、且それには、個別的面と普遍的方面とが存するが故に、人生にもこれに順じて人格と文化との二面がある。即ち、價值としての人生の個別的、主観的、動

力的方面が人格であり、其の普遍的、客観的、成果的方面が文化である。但し、この二面は實際に於ては離れ離れになつてゐるものではなくて、表裏相即するものである。

尚、文化は、價值的現象であると共に、歴史的、社会的、現象であり、そして其の典型は國家的文化である。人格が國家的人格即ち國民としてのみ始め真に價值ある人格となり得るのも、亦これがために他ならぬ。

### 第六項 人性の過程

人生には諸多の過程があるが、これを間接的段階と直接的段階とに二分することが出る。

人生の直接的段階とは、修養又は教化の段階である。修養又は教化とは、嚴密な意味の創造即ち客観的創造を為し得る程度まで創造

性を發達させる段階であり、且つこれは、幫助的のもの即ち教育と獨立的のもの即ち自修とに別れる。

人生の直接的段階とは、活動又は実生活の段階で最密な意味の創造即ち客観的創造を直接使命とする段階である。

修養教化は、人生の前段的一面即ち自覚性の内容的意義であり、實質的に人生を非人生から區別せしめると共に、修養教化の目的又は結果として、修養教化を可能ならしめる根柢となるところの活動実生活と表裏してのみ、價值を有するのである。實に、修養も活動も、教化も実生活も、等しく人生の本質的要因又は分野たる點に於ては、同位的であるが、而も、修養教化のための活動実生活ではなくて、活動実生活の<sup>修養教化は、修養教化による活動実生活による</sup>ための修養教化であると共に、活動実生活によつての活動である點に於て、活動と修養又は実生活と教化とは、目的と手段又は後段と前段との關係に立つことは、否々難き事實であ

る。そしてこの關係は、個別的人生に於て極めて明白に現はれてゐるところである。即ち、普通的人生に於ては、教化と実生活との

關係は左程明白ではないが、個別的人生に於ては、修養は活動に先立つと共に活動は修養の目的となつてゐるのである。

但し、修養と活動との時間的關係即ち、先行關係は、單に一回限りではなくて、連環的、辨證的乃至全生涯的である。修養は常に活動を目的として行はれると共に、活動は修養の成果である點に於て、別言すれば、修養の良否がやがて活動の優秀の原因であると共に、活動の優秀がやがて修養の良否の結果であるが故に、活動が論理的に先行しないところに修養のあり得る筈がなく、又修養が時間的に先行しないところに活動のあり得る筈もない。

尚、これを其の形態から見れば、修養教化は、人生の個別化的、主觀化的現象であり、動力面、直接面又は受動面であるのに對し、

活動実生活は、人生の普遍化的、客観化的現象であり、成果面、直接面又は発動面である。一言に前者を人生の人格的方面と稱し得べくくば、後者は、文化的方面と呼ぶことが出来る。

## 第五章 認識論

### 第一節 認識論の意義及び價值

認識論とは、認識の本質を徹底的に論究することによつて、知識一般の根據を確立することを職能とする哲學の一分野である。即ち、認識とは如何なるものであり且如何なるものであるべきかといふこと、別言すれば、認識の可能性と妥當性とを明かにすることによつて、哲學の論理的基礎を構成し、其の一大分野を完備すると共に、科學の根本假定を解明することによつて、これに確乎たる學的基础を附與するものである。

認識論は、知識即ち常識及び科學的知識を批判し、其の可能及び妥當の根據を明かにするものである點から見て、知識の知識、知識學、知識哲學、知識批判、認識批判乃至科學批判等とも呼ばれ、又知識の理想を求める點に於て、真理學などとも稱せられる。



尚、認識論は、哲學の分野中最も後氷て成立し、嚴密にはカントの力に依つて成立したものであり、隨つて其の名稱も十九世紀初頭に於て一般に使用されるやうになり、而も其の以後に於ても、これを論理學と呼ぶものが少くないのである。

さて、認識論の哲學に於ける地位は極めて高い。哲學は何よりも先づ學であり、そしてそれは認識論の力に俟たなくてはならぬからである。併しながら、これを以て哲學の中心精髄と見るのは誤謬である。認識論は、畢竟、形而上學同様、哲學の一分野に過ぎないばかりか、形而上學こそ寧ろ哲學の本部だからである。而も、研究乃至創建の順序に於ては、認識論が最初に位すべきものである。

### 第二節 認識論の分野

認識論は、其の使命に順じて、先づ二大分野に別たれる。「認識

とは何ぞや」といふ問に答へる方面、即ち、認識の事實又は現實面を明かにする方面は、狹義の認識論又は認識本質論であり、「認識は何であるべきか」又は「真理とは何ぞや」といふ問に答へる方面は、認識の理想論、真理論又は論理哲學である。

### 第三節 認識の本質

認識の本質論は更に三つに別れる。一、認識の可能論、二、認識の要素論、三、認識の對象論が、即ちこれである。

#### 第一項 認識の可能

認識論の最初の問題は、認識可能の問題、即ち、「認識、詳しくは真に價値ある客観的な又は、普遍妥当的な認識は可能であるか」といふ問題である。而も、この問題は、実は、認識論全体の問題であ

る。認識論は、普通妥当的な認識の本質を闡明することを職能とするものである。そして、普通妥当的な認識の本質を闡明する根拠とするものは、その可能だからである。

併しながら、認識の可能といふことは、認識の可能といふことが普通妥当性を持つてゐるといふことを假定してのみ肯定し得ることであるが故に、認識可能の問題は、結局、認識の一問題に過ぎない。認識の可能に對する解答に三種ある。獨断論、懷疑論、批判論が即ちこれである。

①獨断論は、認識の本質を十分吟味することなしに普通妥当的な認識の可能を肯定するもの（肯定的獨断論）又は、可否定するもの（否定的獨断論）である。

②懷疑論は、認識の可能不可能隨つて普通妥当的な認識の有無に對して断定を下さず、寧ろ認識の主観性、相對性を力説するものである。

り、何かかといへば、否定的獨断論に近いものである。尚、認識問題に對し、完全確実な解決を断念しながら、而も尚蓋然的な解決を豫期するものは、蓋然論と呼ばれる。

③批判論は、認識の成立し作用する基礎條件を論究した上で、其の可能を肯定し、且其の可能の範圍を限定するもの。即ち、認識又は普通妥当的な認識の可能、不可能を決定する前に、先づ認識力其のもの、即ち、認識の原理、條件限界等に對して慎重な吟味を施す立場である。

以上の中、批判論は最も妥当である。前述の如く、認識論は、知識の知識を求めるものであるが故に、其の本質を論究することなしに、無下に其の可能を肯定したり否定したりすることは、この問題に對して正しい解答を與へる所以ではない。併しながら、認識の可能、不可能に對して一定の断定を下さないといふことも亦誤謬である。

る。何となれば、認識の可能、不可能に對して一定の断定を下すことが出来ないとする事は、認識の可能を消極的に肯定する意味の断定を下したものである。これ、批判論の正しい所以である。そして、批判論は、カントの取つた立脚地であるがために、カントは認識論の確立者であるといはれる。尚、カントは、獨断論を專制政体に擬し、懷疑論を無政府にたとへてゐる。

但し、批判論は、徹頭徹尾前記の両立脚地と異なるものではなくて、寧ろこれらを折衷統合したものである。即ち、先づ、認識の可能を疑ふ點に於て、懷疑論に近似し、次に、認識の範圍を経験分内に限る點に於て、否定的獨断論と共通し、更に、認識及び普通妥当的知識の可能を肯定する點に於て、肯定的獨断論と符合する。

要するに、批判論は、認識即ち普通妥当的知識の可能を肯定するが、而も、其の認識又は知識は、單に経験分内のもののみであると

共に、斯かる認識や知識を可能ならしめる條件、即ち、認識の確實性及び必然性の基礎は、吾々が経験に先立つて具有する主観の形式に存するとした點に、其の特色が存するのである。

### 第二項 認識の要素

認識の要素論は、認識は如何にして成立するか、其の構成要素は何か、如何なる認識が真に確實であるか、又は、確實なる認識が成立するには如何なる要素が必要か、といふ、問に答へるもので、認識の起源論とも呼ばれ、畢竟するに、「認識の確實性」を明かにすることを使命とするものである。

認識の要素論に、唯理論、經驗論、批判論の別がある。

三唯理論は、認識の根本要素は理性であり、理性は経験に先立つて、即ち、先天的に人間が生得本具するものであり、隨つて、認識

は、絶対に確實にして必然的なものであると共に、神、靈、本体といふやうな超經驗的なものも認識することが出来るとするもので、又先天論とも呼ばれる。

唯理論者に從へば、感覺は断えず変化するが故に、それによつて獲た知識即ち感覺的知識は、單に其の感覺者に價値があるだけで、一般即ち普遍的價値がある訳ではなく、随つて、感覺作用の刹那に價値があるだけで、必然性がある訳ではないのである。然るに、理性は、本来普遍的であるから、これに依つて行つた認識は確實性即ち普遍性及び必然性を有するのである。

三經驗論は、認識の根本要素は經驗で、一切の認識は經驗から生ずるとするものである。そして經驗とは感覺を意味するが故に、感覺論又は後天論とも呼ばれる。

經驗論者に從へば、人心は、本来、白紙と同様、何等先天的に與

へられたものがなく、理性といふが如きも、特殊能力ではなく、經驗に依存し、經驗の成果としてのみ存在し得るものであり、随つて認識は、經驗に依存してのみ、又は、經驗分内に於てのみ可能であり、おのづから又神や本体等の經驗に基づかない、形而上學的知識は、確實性を具へてゐないのである。但し、經驗乃至感覺は、一經驗、一感覺としては確實であるが、其以外には適用することが出来ず、只一部からこれに類似する他の一部を推論するだけで、普遍性、必然性を有するものではない。

三批判論は、理性及び經驗を以て、認識の不可欠的要素と見、且この要素の共働作用の結果として認識が成立するとなすものである。批判論に從へば、認識は、經驗を俟つて、又は經驗と共に成立するけれども、經驗から成立するものでもなく、又は、經驗のみに依つて成立するものでもない。蓋し、人間は單に經驗に對して受動的

になるばかりではなく、進んで経験を齊整し統制する能力即ち理性を、経験に先んじて即ち先験的に稟有してをり。経験は、この先験的理性を觸発するために、素材又は機会を提供することによつて、認識の一要素となるものだからである。併しなから、理性も、其自身だけでは発動することが出表す、必ず経験に俟たなくてはならぬのである。

要するに、批判論に従へば、認識は、理性を形式とし、経験を素材とし、且前者を以て後者を統一することによつて成立すると共に、認識の形式は認識分内に於てのみ統一力を有するのである。斯くの如く、批判論は、理性と経験を認識の不可欠的要素とする點に於て、即ち、認識の普遍性、必然性を認める點に於て、唯理論を採用し、認識の内容と客観的要素とを認める點に於て、経験を採用してみるといふ意味では、唯理論と経験論とを公平に折衷して

認識要素論に一段落を附したかのやうに思はれるが、実は、幾分唯理論に傾いてゐるのである。何とせば、先験的な理性を以て認識成立の根本条件とし、且理性を発動的、創造的のもの、即ち客観の構成者又は自然界の立法者と見、更に、認識は、認識主観がこの理性によつて外界を規制した結果としてのみ成立すると見る所に、批判論の真趣が存するからである。これ、批判論が先験論と呼ばれる所以である。

以上の略述によつて明かなやうに、唯理論と経験論とは、其の内容に於ても、其の価値に於ても、寧ろ對立的關係を形造るものである。即ち、一方の長所は他方の短所であり、一方の短所は他方の長所となつてゐる。

これを評言すれば、唯理論は、認識の要素の形式的、先天的、普遍的方面を重視する點に於て、即ち、理性は、本来普遍的であるか

う。これによつて得た認識は確實性を有し、且普遍性、必然性を有するとする點に於て、經驗論に優るが、認識の要素の實質的、後天的、特殊の方面を蔑視する點に於て、經驗論に劣るのである。

これに對し、經驗論は、認識の要素の實質的、後天的、特殊の方面の價値を高調する點に於て、唯理論に一步を抜くが、認識の要素の形式的、先天的、普遍的方面を排除する點に於て、唯理論に一段劣るのである。

斯くして、唯理論も經驗論も、只一つだけでは、不完全で、兩者を補合する時に始めて全き認識要素論が成立するのである。そして茲に、批判論の存在理由が積たはつてゐる。

### 第三項 認識の對象

認識の對象論は、認識の客観性又は妥当性を對象とする分野で、

如何にして其の本原に於て主観的な認識が客観的妥当性を有し得るか、又は、吾々の認識し得るものの本質は何か、それは全然主観的なものか、それとも客観的なものか、若し客観的なものとしたなら其の客観的對象は如何にして成立し得るか、更に、主観的には確實性を有し、客観的には普遍性を有する認識とは何か、といふやうな問題に解答を與へるのが、即ち、一言にすれば、認識と其の對象との關係、又は、認識の客観的價値の條件及び限界を闡明するのが、認識對象論の任務である。

この對象論は、狹義の認識論中最も重要な部分であるが故に、通例、認識の本質論とも呼ばれる。

認識の對象論に、實在論、觀念論、現象論の別がある。

三實在論は、認識の對象は、客観世界に獨立的に

存在し、主観又は意識を超越する實在であるとするものである。別言

す此は、認識は、吾々の観念が外界に存在する実在より刺激を受ける結果、これを模寫することによつて成立するとするものである。

③観念論は、認識の対象は、主観的な観念、即ち、認識主観の意識内容であり、随つて、認識は、吾々の観念が構成したもので、実在といふが如きものも、観念に依存する限りに於てのみ存在し、観念即ち認識主観を超越して独立的には存在するものではないとするものである。

④現象論は、認識の対象は、客観と主観又は実在と意識との合力によつて、別言す此は、実在としての物自体が意識を觸発して、其の中に生起せしめた現象であつて、物自体即ち認識主観や意識を超越した獨立<sup>的</sup>実在でもなく、又実在と全然没交渉な個々の意識即ち観念の所産でもなく、実在的にして観念的なものであるとするものである。これ、現象論が、実在論と観念論とを折衷調和したものである。

いはれる所以である。

實際、現象論は、実在論と観念論との長所を併せ活用したものである。そして、実在論と観念論とは、全然正反對な見解であり、且其の長短共一面的な所に、即ち、前者は客観に偏し、後者は主観に傾く所に存する。随つて、両者の関係は矛盾的なものではなくて、補合的なものであるが故に、一層根本的な又は一層包括的な見地に立てば、両者を調和統一することが出来るのである。この立場がやがて現象論である。

但し、厳密にいへば、現象論は、観念論に一層近以してゐる。蓋し、現象論に従へば認識の対象は、只現象となつたもの、即ち、実在が観念に現れた象だけ、詳しくは、認識主観たる観念即ち意識一般によつて規制された統一されたもののみで、実在其のもの即ち物自体は、さながらには認識されないし、而も「観念に現れる」といふ

ことは、實在を觀念が受動的に模寫するといふことではなくて、倒に、觀念が發動的に實在を規制するといふことだからである。現象論が、普通の觀念論に對して批判的觀念論と呼ばれる所以が、やがて茲に存する。

尚、現象論に於ける主観は、個人的主観即ち經驗的主観ではなくて、普遍的主観即ち先驗的主観であり、隨つて、現象論は、認識の客観性は先驗的主観一般の形式を成す統一作用に基くと見る點に於て、先驗的觀念論とも呼ばれる。

最後に、現象論は、認識は現象のみに限られて、現象を惹起する超越的存在即ち物自体は全く認識し得ないが、而もこれは、実践理性即ち、情意の對象であるとしてゐる。

#### 第四節 認識の理想—真理

認識の理想論は、認識論の精髓又は堂奥である。認識に関する一切の論義は、正しき認識即ち普遍妥当な真に客観的價值ある認識を獲得することを究極目的とするものだからである。尚、認識の理想は、普遍、真理又は論理的價值と呼ばれてゐるが故に、認識の理想論は、真理論とも論理哲學とも呼ばれる。

以下、性質、動力、標準、價値の四項に別つて認識の理想を略述することとする。

#### 第一項 真理の性質

真理は、認識の理想、標準、規範で、何人も認むべき知識、即ち普遍妥当性を有する知識であり、觀念と觀念又は思想と思想との關係について下された正しい判断であり、隨つて、それは勿論、事物其のものでも事物の性質、状態でもなく、又觀念其のものでもない。



これ、真理は「存在する」といふべきではなくて「妥当する」といふべしとされる所以である。

斯くの如く、真理は、観念間・思想間の関係中に成立するものであるが、観念や思想は必ず其の対象を有するが故に、真理は、当然これらと実在との関係を豫想するものである。斯くして、真理の性質に關して、模寫説及び構成説といふ二つの反對説が成立することとなるのである。

○模寫説は、真理は、観念又は主観が超越的な実有を模寫したものの、即ち、観念が実有を正しく一致契合したものとする真理説で、恰も實在論に近似する。

○構成説は、真理は、普遍的な先驗的自我が構成したもので、其の特質は、必ず考へなくてはならない。又は、それ以外には考へることを許さないといふ條件、即ち「思惟の必然」といふ條件を具へ

る所にあるとする真理説である。

以上の二見解は、勿論、構成説が正しい。実有は意識であるが故に、模寫することが出来ないからである。假に、実有が純粹に客観的のものであるとしても、知識が実有に一致契合することによつて真理となる前に、実有が存在することが真理でなくてはならないと共に、実有に一致しない真理もあるからである。否、真理は、他に依存して成立するものではなくて他を成立させるものだからである。爭突、真理を假定することがなくては、何等の立言も出せず、又、ホルツァーの言の如く、「少くとも真理が一つある」ことは、意識又は判断可能の根本假定でなくてはならないのである。

要するに、真理は、判断の規範、思惟の基本要索又は認識の理想であるが故に、普遍的、客観的にして先驗的な思惟一般が、当然必然さう考へなくてはならないとしたものである。

第二項 真理の動力

真理の動力は、真理を構成する原動力で、これに関する観方に主知主義、主情意主義、理性主義の別がある。

一主知主義は、真理の動力を理知と見るものであり、二主情意主義は、情意と見るものであり、三理性主義は、理性と見るものである。そして理性主義が最も妥当である。蓋し、真理は理想であるが故に、それは全意識的作用であり、随って、真理の動力は全意識の統制者でなくてはならないのに、理性こそはこれに該当するものだからである。別言すれば、理知も情意も離れ離れに作用しては、真理といふ全一体を創造することが出来ないからである。但し、真理は論理的價値であるが故に、其の直接動力は理知である。

第三項 真理の標準

真理の標準は、真理をして非真理即ち虚偽から區別せしめ、真理の高下を始め、諸多の種別を決定する規準であり、そしてこれに関する見解に、形式説、実質説、調和説の別がある。

一形式説は、判断の形式其のもの、即ち、完全な判断又は理想的判断（例へば、「思惟必然性」とか「中庸」とか）を標準とするものである。

二実質説は、判断の内容、即ち、判断の目的又は效果（例へば判断の實用）を以て標準とするものである。

三調和説は、形式説と実質説とを調和したものである。真理の標準は、真理の價値と密接な關係を有する問題で、若し真理を絶対的のものと見る時には形式説が妥当であり、真理を相對的のものと見る時には実質説が適切である。然るに、真理は理想であ

り、理想は只形式的にしか規定し得ないものであるかぎり、形式説が妥当である。

但し、これは、真理其のものについての観方であつて、真理を活用する場合には、実質説も亦有効である。真理を活用する場合に必ず何ものかを目的とし、且それに對して有效なものでなくてはならないし、而も個々の目的や効果は主観的、相対的なものだからである。

併しながら、真理其のものは、活用の有無によつて其の價値が決定されるものではなくて、寧ろ真理であるが故に活用されるものであるから、其自身完具してぬさへす水即ち理想として完全であり、さすればばよいのである。勿論、最高理想でないものでも真理と見做されるものがないでもないが、これは、只最高理想としての唯一真理を豫想し、それを俟つてのみ、真理としての價値を具へるものであることは、「よりよい」といふ

ことは「最もよい」といふことを豫想してのみ可能であるといふことと同様である。

随つて、普通いふ所の実質的真理なるものは、不完全な真理であつて、それを許すことは、真理の標準は実質でなくてはならないといふことと趣を異にすることを忘れてはならない。

但し、これは、真理を單に論理的價値として見た場合であるが、それを人生に於ける理想價値の一部として、即ち一個の文化價値として見る時には、これと異り、真理の究極標準は全体としての人生の理想、即ち全体としての、理想價値でなくてはならない。

#### 第四項 真理の價値

真理の價値は、真理の妥當の内容であり、且これに関する観方に、相對論と絶對論との別がある。

○相對論は、真理の價値を相對的に見、如何なる真理と雖も完全なものがなく、皆條件に應じて變化すると見るものであり。○絕對論は、真理を絕對完具にして永恒的なものと見るものである。

相對論は、真理と真理の活用とを混同したもので、又は真理を廣義に解したものであり。隨つて、嚴密な真理觀としては、不完全であるのに對し、絕對論は、真理を認識の最高理想と見る狹義の真理觀としては妥當である。

實に最高真理は絕對的のものでなくてはならない。併しなから、この種の真理は、理想であり、基本要索であり、所謂限界概念であるが故に、實在しないことを忘れてはならない。隨つて、真理は相對的にして絕對的であると見るのが一番妥當である。

但し、真理の相對性は、其の絕對性を豫想し、且それと交渉を繰つ限りに於てのみ、真理の特質を形造るものである点から見れば、

即ち、絕對性は、相對性よりも一層本源的なものであり、一層高次なものであつて、絕對性から相對性を導き出すことは出来るが、相對性から絕對性を導き出すことが出来ない点から見れば、真理は、(相對性を包含するものとして)絕對的であるといはなくてはならない。

尚、真理は、絕對的と相對的以外、形式的と實質的、理性的と事實的、客観的と主観的、理論的と實際的、一般的と特殊的、哲學的と科學的等に別つことが出来る。

(附録) 研究問題

- 二 哲學の價值
- 三 哲學の意義
- 四 哲學の定義
- 五 哲學の形式
- 六 哲學の要素
- 七 哲學的精神
- 八 哲學の屬性
- 九 哲學の内容
- 十 哲學の分野
- 十一 哲學と科學

研究問題

- 一 哲學の研究法
- 二 哲學の態度
- 三 懷疑的態度
- 四 人生觀の種類
- 五 人生の定義
- 六 自覺とは何ぞ
- 七 否定的人生觀の叙述及び批評
- 八 個別主義的人生觀の叙述及び批評
- 九 現実主義的人生觀の叙述及び批評
- 十 唯物主義的人生觀の叙述及び批評
- 十一 人生が創造であるとは如何なる意味か
- 十二 人生の形態
- 十三 人生の内容及び分野

- ⑤ 人生の過程
- ⑥ 認識論の意義及び價值
- ⑦ 認識論の分野
- ⑧ 唯物論の叙述及び批評
- ⑨ 經驗論の叙述及び批評
- ⑩ 認識要素論に於ける批判論とは何ぞ
- ⑪ 實在論の叙述及び批評
- ⑫ 觀念論の叙述及び批評
- ⑬ 現象論とは何ぞ
- ⑭ 真理の性質
- ⑮ 真理の標準
- ⑯ 真理の價值

昭和十三年一月三十日印刷  
昭和十三年二月十日發行

哲學概論 奥付  
定價金七十錢



著者 稻 毛 詛 風  
 東京市牛込區早稻田鶴卷町四三六  
 發行者 坂 井 美 子 吉  
 東京市牛込區早稻田鶴卷町四三六  
 印刷所 世界堂 謄寫 版部

發行所 早稻田大學前通 世界堂書店

終

Y.70